

優秀なサンタ

済美高校 P.N. 村田 間日

サンタは夢の欠片を集めることで生きている、という伝説を聞いたことがあるだろうか。世界中にいくつもある、サンタの伝説の一つだ。サンタは何故プレゼントを配るのか。それは、子供達の幸せのためでも、あふれるボランティア精神のためでもない。生きるためである。

彼らは「夢の欠片」という物を体内に取り込むことで生きている。それは人の目には見えないうが透明に光り、心が満たされることで発生する。夢が叶うと頭から生えて実となるのだ。サンタはそれを人間に気づかれないよう収穫する。そしてクリスマスに集めた欠片を一年かけて食べるのだ。まあ最近では味が落ち美味しくはない。しかし取り込まなければ死んでしまう。味と栄養価には関係がない。

サンタが子供ばかり相手にするのはそのためである。大人は簡単に信じてはくれないし、願う望みが複雑だ。世界平和なんて望みを叶えていたら、とてもじゃないが割に合わない。

今では一部でひっそりと語り継がれているだけの小さな伝説。しかし、彼らは実在し、世界中から夢の欠片を集めながら、細々と生活していた。そして、現在のサンタには、昔は無かったある性質が生まれている。

「子供なんぞ嫌いだー」

彼らの中で、特にベテランには子供嫌いが圧倒的に多いのだ。まだ若いサンタの彼は、それが納得できなかった。ろくに欠片を発生させられない落ちこぼれで、子供達のために努力しても、何故か心が満たせない。だが、彼は他の誰よりも子供達が好きだった。子供嫌いな他のサンタが何故子供の夢を叶えることができるのか、全く理解できなかった。

日の暮れた空の中、通勤用のソリからクリスマス一色の夜景を見下ろすと、遙か先まで見えるという目に、たくさんの子供達の笑顔が映る。純粹そうな声を聞くといつも幸せな気持ちになる。何よりも子供の笑顔が好きだ。

「あの子達にしようか」

サンタといえども全ての子供の夢を叶えることなどできない。最近は大入達が子供のために願いを聞いているから楽になった。サンタが夢を叶えなくても夢の欠片が落ちていることがあるからだ。しかし、それでもまだ足りないので、叶えやすそうな子を選ぶ。毎回、子供を喜ばせようと努力するが、上手くいかない。次こそ自分の手で欠片を生み出したい。

電飾が張られた家の窓の一つから光が漏れてくる。もう時間は遅いが、クリスマスは子供が夜更かししても怒られない数少ない日だ。

一人目の中学一年生の少女は自分の部屋で貰ったプレゼントを開けていた。サンタとして身につけた住居侵入術で窓の中へと入る。

「やあ、君が欲しい物はなんだい？」

「は、うわっ、なに」

思い切り不審がられている。ニニコしていた顔は引きつり、体は今にも逃げそうだ。でも貰ったプレゼントは胸に抱えて離さない。

「僕はサンタ。何でも夢を叶えてあげよう」

「は、偽物でしょ？」

「ううん、本物。ほら」

何もない所から小さな箱を取り出した。途端に少女の目が輝きます。警戒心が解け、キラキラとした目でこちらを見てくる。プレゼントを置いて、彼の前にやってきた。やはり中学生といつても子供。可愛い。

「何が欲しい？」

「えっとね、うーん……」

期待を膨らませた笑顔で真剣に考え始める。

「何でもいいんだよ」

「……………男が欲しい」

「え」

「友達が彼氏のことを自慢してくるの。うざいから友達よりかついい彼氏が欲しい。あ、性格とセンスと都合のいい人だと嬉しいな」

どうやって家を出たのか記憶に無い。いつの間にか手には夢の欠片が握られていた。

五歳の男の子は、「金」と即答した。好きな物を好きなように買うためらしい。大人の買う物は趣味に合わないと言う。少年は満足な金額を彼から貰うと、すかさず読まなくなった絵本に挟んでいた。満面の笑みで。

七歳の女の子はアクセサリをねだった。彼女は彼が手作りした首飾りをつけると嬉しそうに笑った。そして彼がいなくなるとすぐに無表情ではずし、ビーズと紐を分別して躊躇無くゴミ箱に捨てた。ため息をつきながら。

子供達のあの笑顔に何が隠されているのだろうか。考えているだけで気持ち悪くなる。

彼は子供の笑顔が何より嫌いになった。もう、子供を見ても嫌悪感しか湧かない。これからは、子供達の欲を機械的に満たすことで生きていこうと悟る。心を碎く必要はない。

「……帰ろう」

そうして、この世から一人子供好きのサンタが消え、優秀なサンタが新しく生まれた。